

ルポ ムンバイの日本人先達の足跡をたどる

誇りを胸に「孟買」を生き抜いた人々

読売新聞ニューデリー支局長

永田 和男

「ムンバイ(旧ボンベイ)の日本人墓地が設置から百周年を迎えるんですが——」。ニューデリー支局の事務所で、ムンバイ日本人会国際部の尾崎英夫さん(インド住友商事ムンバイ支店長)からこんな電話を受けたのは、二〇〇八年(平成二十年)八月下旬の、夕方近くのことと記憶している。「えっ」という思いがした。外はまだまだ蒸し暑い時期のことである。事務所の中で、当然のように冷房を利かせながら、インターネットで日本のニュースを眺めたりしていた時のことだ。暑くてもエアコンも冷蔵庫もない、日本との電話など思いも寄らない百年前のインドで暮らしていた日本人がいた。それも、墓地が出来るといふからはかなりの規模のコミュニティがあつたはずだ……。そう考えただ



ムンバイ市点景 約100年前に建てられたプリンス・オブ・ウェールズ博物館

けで、気が遠くなるような思いがした。

とにかく一度、訪ねてみなければ。そう思い立って、九月中旬にムンバイへ向かった。尾崎さん、大曾根恒さん(東洋エン지니어リング・インディア社長)の案内で、ムンバイ・ウォルリー

にある日本人墓地へ向かう。モンスーンの季節の間にすっかり雨水を吸い込んでいる様子の敷地内。苔むす敷石の上を歩いているうち、何度も滑りそうになったのを覚えている。「墓地」と聞いた時から、墓石がいくつも並び立っている光景を想像していたのだが、供養塔が、失礼な言葉だが、ぽつんと立っている光景に、やや意外な思いがしたものだ。

ただ、供養塔の墓誌には、かつてこの地に住み、働いて倒れて、ここに祀^{まつ}られた人々の名前や享年が、しっかりと刻み込まれている。最も古い日付は一八九一年(明治二十四年)四月二十二日。享年二十歳。女性の名前だ。続いて明治二十六年、二十九年、三十年……。やはり二十歳前後の若い女性や、三十歳前後の、働き盛りの年代の男性の名前が多いなど

いう印象だった。

明治から大正、昭和の初めにかけて、英植民地時代から商業の都として栄えたボンベイの街で、この若い日本人たちは一体、何をして暮らしていたのだろう。

墓地訪問の後、やはりウォルリー地区にあって、「ジャパニーズ・テンプル」としてムンバイでは広く知られている、日本山妙法寺の森田捷泉住職を訪ねて、話を聞いた。

住職の話や、いただいた資料を読んで初めて知った、戦前の「孟買」を舞台とするビジネス模様、インド独立の父マハトマ・ガンジーと戦前のボンベイ日本人社会の意外な関係、異国の地にあっても、着物と日本髪姿で通して、健気に生き抜いた女性たちのことなど、縁あってこの街に暮らした日本人たちの百年間の様々な物語は興味が尽きることはなかった。



日本人墓地は、「孟買日本人会」が一九〇八年（明治四十一年）、ボンベイ市当局に対して、邦人の荼毘^{だび}を行う場所として、永代自由使用許可を求めて、設置が許可された。この許可を与えた、当時のボンベイ市の公文書も確認されている。

この一九〇八年には、九州・島原の出身で、当時インドを旅していた広田言証という上人がボンベイを訪ねた際、亡くなった人の施餓鬼^{せがき}（供養）を「孟買日本人墓地」で行って



ムンバイ市点景 世界遺産に指定されている
チャトラパティ・シヴァジ駅（旧ヴィクトリア・ターミナス）

いる模様が、写真として残っている（口絵参照）。

この写真は、二〇〇八年（平成二十年）十月三日に行われた、日本人会の墓参会の際にも、出席した人々にラミネートで加工したコピーが配布されている。写真には、大きな二本の木の前で、約二十人の男女が、上人とともに手を合わせるなどして祈っている様子が写っている。老人や子供はいない。一本の木の幹には、「日本人孟買在留人之墓」と書かれている。男は背広にネクタイの人が多いのに対し、女はほとんどが和服で、頭の上に高く盛り上げた髪形をしている。

広田上人のことを書いた「島原のからゆきさん 奇僧・広田言証と大師堂」（倉橋正直著）という本によると、広田上人は、五十四歳の時から二年以上をかけてインドに仏跡巡礼の

大旅行に出るのだが、この本に記された旅の様子は、大冒険としか言いようのない破天荒なものだ。

インドでは、まずカルカッタ（現コルカタ）に着き、釈迦が悟りを開いて仏陀になった所であるブッダガヤに向かう。そこからベナレス（現バラナシ）へ行き、日本人で初めてチベットに入ったことで知られる河口慧海を訪ねて教えを請う。河口は、ベナレスで当時、サンスクリット語を学んでいた。五日間案内してもらった後、六日目にカルカッタに戻る予定で駅に向かったが、駅で突然、「ボンベイに行きたい」と言い始める。正反対の方角である。二昼夜の汽車の旅の末、ボンベイではエレファンタ島の石窟寺院を見学するなどしている。日本人墓地で施餓鬼をしたのも、その際のことらしい。



ゲルモハールの花

英語もヒンドゥー語もほとんど話せない日本のお坊さんの一人旅である。河口から、釈迦の誕生の地は「ネパールのバガンプール、ルンビニーである」と教わると、喜び勇んで訪ねて行くが、汽車の駅を乗り越してしまい、やっとの思いでルンビニーの最寄り駅であるノーガール駅に着くと、駅員や土地の人をつかまえては、ひたすら、「ネパール、バガンプール、ルン

ビニー」と朝から夕方まで、念願のルンビニーへの道を聞いて回った。こうした驚くべき行動力と熱意で、インドの仏跡巡礼を重ねていった上人は、「奇僧」の異名がまさにふさわしい。

そして、旅の途中、東南アジアなどで立ち寄った各地では、「日本から坊さんが来た」ということで、日本人墓地での施餓鬼を頼まれるのが常だったという。広田上人は写真が好きだった人らしく、各地で写真が残っているとされ、施餓鬼の際に包まれたお布施の記録が残っている。その中には、いわゆる「からゆきさん」出身の、置屋の経営者と思われるような人々からの寄進の記録もあった。

広田上人の出身地である天草地方からは、「からゆきさん」として海外に渡った女性が、明治時代以降、三十万人にも達したと言われている。こうした女性たちからの送金は、当時の日本では重要な外貨の供給源でもあった。広田上人はインド行きに先立ち、一九〇三年（明治三十六年）にはシベリア旅行も行っているのだが、ロシア語もわからない上人が頼ったのは、「当該地方にいた、からゆきさんとその関係者の助け」だった。からゆきさんたちがいた地域は、南国だけでなく、ロシアにまで広がっていたというのだ。広田上人の旅が二年半の長期に及んだのも、主要都市だけでなく、日本人女性たちが暮らす奥地までをくまなく回っていたためだとされる。



ムンバイ市点景 2008年11月のテロ事件で
標的となったタージ・マハール・ホテル旧館

体格の堂々とした男たちが目立った。燃えるような街のコンクリートのうえで瞑想したまま、身動きもしないインドの男たちがいると思えば、そばに牛がねそべっていた。額のまんなかに赤い小さな丸印をつけているものもいた。…かっと炒るような光の中を、中国人もヨーロッパ人も歩いていた。サリーをまといベールをたらしっている女も見受けた。そんな人々の中でユダヤの男はきわだっていた」などと記されている。日本人女性の目に映った国際都市の雰囲気伝わってくる描写だ。

上陸したヨシさんは、「この様々な人種の群れに興奮」し、同時に、天草に住んでいたときには意識しなかった、「日の丸」が心身を突き動かすのを覚えた、とある。

ヨシさんは、貸しビルの一室で「医院」を開業するが、当時、ボンベイ市内には「色街」

森田住職によると、ボンベイにも、こうした日本人女性が、最盛期の明治末から昭和の初めにかけては二百〜三百人はいた。また、ボンベイだけではなく、インドの内陸地方など国内いたるところにも、からゆきさんが住んでいたことがわかっている。

一九〇八年に広田上人が行った施餓鬼の写真を見ると、写っている女性はほとんどが着物姿で、髪も日本髪の人が多い。望郷の念を抱きつつも、インドの地にしっかり根を下ろして、しかも、日本女性のたしなみを忘れずにこの地で生涯を終えた人が多かったことがしのばれる。



もう一冊、「からゆきさん」（森崎和江著）という本には、天草出身の「ヨシ」という名の、一八八六年（明治十九年）生まれのからゆきさんのことが紹介されている。十九歳でからゆきとなり、日露戦争後、上海で「娼妓奉公」をするが、その後、シンガポールに密航して、今度はかたぎの商売に就けるよう、上陸後は「日本人にみつからぬよう」に走って外国人経営の爪磨きの店にかけこんで雇ってもらったという。

三十五歳になった一九二一年（大正十年）にインド行きを決意して、当時のボンベイに渡り、「ジャパニーズ・マッサージ医院」を開業する。

一九二二年二月のボンベイ上陸の印象は、「異様な熱気があった。ターバンを巻いた、

される思いがする。海外に出て仕事をしている者として、このヨシさんに対した時に恥じることがないだけの心構えを、果たして自分は持っているだろうか、と自問せざるを得ない。

再び森崎氏の本に戻ると、ヨシさんのマッサージ医院にはたちまちインドの王侯など多くの客が付き、その中には、マハトマ・ガンジーもいた。

ヨシさんはガンジーを尊敬し、当時ガンジーが英国からの独立を目指して指導していた不服従運動を応援するようになる。ガンジーが「ジャパニーズ・マッサージはたいそう調子がいい」と言っているのを聞いて、感激したこともあった。ガンジーが裸足で農村を回る姿を見て、「インドは自分の国を失ったけど、きつとまた取り戻す。ガンジーのような偉か人が、自分のことはなりふりかまわずに、一生懸命説教して歩いておられる」と感動していたという。

ヨシさんは、ガンジーから銀のつばなど記念品をもらったこともあった。もつとも、後に日本に戻ってから太平洋戦争が始まると、ガンジーに贈られた品々も、武器の原料にするため、供出してしまふ。思い出の品をなぜ供出してしまったかについて、家族には、「日本あつての我が身。ガンジーさんは、国がなくなつたことがインドの不幸とおっしゃっていた」と語って、自分を納得させていたという。インドで目の当たりにした、ガンジーの



ムンバイ市点景 チャトラパティ・シヴァジ駅で列車を待つ乗客

があつて、西欧人は日本人女性を「商売女」と見る傾向があつた時代だつた。雇い入れた三人の日本人女性に、ヨシさんは、「ジャパニーズ・マッサージは客商売じゃなかと。日の丸ば胸におさめた民間外交じゃけん」と言い、白衣を着て、身の振る舞いを堂々とするよう、次のように説いた。

「インド人にはインド人の考えがあるし、イギリス人にはイギリス人の考えがあるし、シナ人にはシナ人の考えがある。いちいち客ばみて相手の考えに合わせよつたら、考えがいくらあつても足らんごとになつてしまふばい。わたしたちは日本人じゃけん、日本の代表と思つてマッサージをすればまちがいはなか。そのかわりいつでも日の丸ば胸に収めて、民間外交ば堂々とやりなさい」

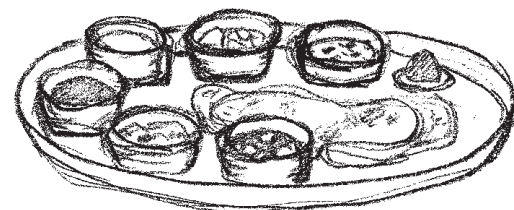
九十年近く前のボンベイで、ヨシさんが言つたというこの単純明快なセリフには圧倒

率いる独立運動の強烈な印象を、終生、忘れることはなかったようだ。



戦争の話で言えば、日本人墓地には、第二次大戦中にインドで抑留、強制収容された人々も眠っている。中でも悲惨なのは、収容所内でのいわゆる、「勝ち組と負け組」の対立で、日本人同士抗争の末倒れたという人々の話だ。

戦争中、マレーシアに住んでいてインドに抑留された、川内光治という人の生々しい体験談が、マレーシア日本人会の会報に載ったもののコピーで、ムンバイの日本山妙法寺に残っている。それによると、英領インドには当時、セイロン（現スリランカ）やマレーシアなどにいた英植民地の日本人たちが集められていた。最初は、デリー郊外のプラナキラ城に収容された。マレーシアから船でデリーに着いたのは、一九四二年（昭和十七年）二月。日本では知らない人が多いが、デリーの冬はなかなか寒い。川内氏の回想によると、二月のプラナキラ城は最高気温摂氏五度。だが、マレーシアでシャツ一枚の姿で拘束された収容者たちは、寒さで眠ることもできなかったという。もともと、三月に入ると気温はじわじわ



カレーセット



ムンバイ市点景 海上から望むインド門(右)とタージ・マハール・ホテル(左)

上がり、時に気温は五十度台。最高では六十一度に達したこともある。砂塵も脅威で、蚊帳の中で口と鼻に手ぬぐいを当てて、口の中に砂が入ってくるのを防いだという。

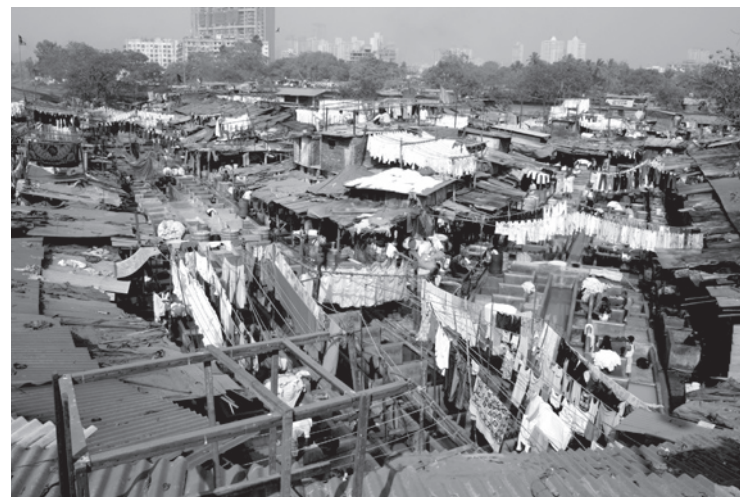
その後、捕虜交換船で八百人あまりが日本に帰国出来ることになったが、その人選が、収容者の幹事をしていた商社の恣意で決められた、と言われて暴動寸前になったこともあるという。

デリー到着から約一年後、日本人捕虜たちは、デカン高原の中央、現在のマハラシュトラ州の東端にあるデオリというところの収容所に移される。ドイツ人捕虜も収容されていたが、人数も日本人より少ないうえ、「一等

国民」の扱いを受けていたため、食事など待遇は日本人捕虜より「かなり良かった」とされる。イタリア人捕虜は「二等国民」扱い、日本人やインドネシア人は「三等国民」だった

たというのが、大英帝国の収容所における、捕虜の扱いであったという。

やがて日本の敗色が濃厚になるが、収容所内では、情報源はインドで発刊する英字紙のニュースしかない。日本の劣勢が紙面で報じられていることについて、これを冷静に受け止める「負け組」と、英国側の宣伝だとして頭から信じない「勝ち組」とに二分され、やがて衝突するようになる。



ムンバイ市点景 零細のクリーニング業者が集まる洗濯場

一九四五年（昭和二十年）の終戦後、「勝ち組」は、英国の宣伝に乗せられた手先だとして、敗戦を受け止める「負け組」を非難し、日本はまだ戦っているのだとの主張を展開する。勝ち組の若者が、丸太を持って負け組を襲い、けが人が出るなどの事件も起こるようになる。降伏した日本軍の将軍が呼ばれて、勝ち組の説得に当たったこともあるが、勝ち組は「将軍は偽物」と決めつけて態度をかた

くなにしていたという。

抗争が激しくなるにつれ、武装したインド兵が配備されて監視に当たるようになるが、勝ち組収容者は逆に殺気立って、ついには機関銃を持ったインド兵に、丸太を手に立ち向かっていった。機関銃射撃で女性や赤ん坊らを含む、二十七人が死亡する痛ましい事件が起きたというが、信じがたいことに、扇動した者たちは子供や女性たちをわざと抵抗の先頭に立て、自分たちは無傷で済んだというのだ。

この事件でようやく勝ち組もおとなしくなり、抗争も収拾に向かったが、機関銃に素手で向かうような無謀を起こすほどの情緒不安定に陥っていた抑留生活者たちの境遇の悲惨さには、まさに想像を絶するものがあったと言わざるを得ない。

こうした衝突事件だけでなく、栄養不足や病気で亡くなった人も多い。

このデオリ収容所で命を落とした人々の遺骨も、同じマハラシュトラ州にあるボンベイの日本人墓地に埋葬されているのだという。



戦前に話を戻すと、ボンベイにいた日本人はもちろん、からゆきさんだけでなく、鮮魚商や呉服店など、いろいろな商売の人が集まって、昭和の初めにかけて、日本人街が形成されていた。総領事館の記録では、一九三〇年（昭和五年）時点で五百八十七人の在留



ムンバイ市点景 アラビア海の海岸で夕涼みをする市民。奥はウォルリーのビル街

ということ、使用人を七、八人使い、車掃除専門の人もある、という生活を送っていて、石橋氏は森田住職に「戦前のボンベイは、それはきれいな街だった」ということをよく語っていたという。

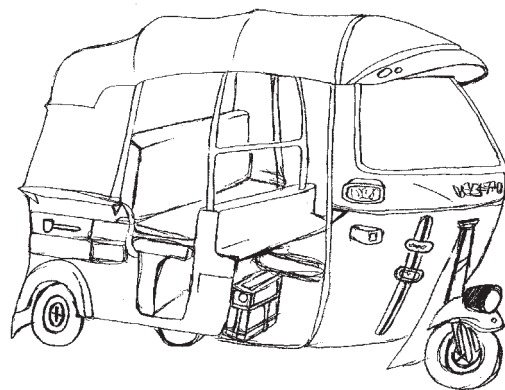
ボンベイにやって来た藤井上人は、十二月一日から断食に入ると言うので、石橋支社長は、修行の場所をどこにしてもらうのがよいか考え、あちこちを案内する。日本人専用のゴルフ場や日本人会館は現在のマリンドライブの水族館のあたりにあったが、上人を連れて行くと、やはりそうした所はふさわしくないだろうということになり、次にウォルリーの日本人墓地に連れて行くと、「あ、ここがいい」ということになって、そこで修行が始まった。

翌一九三二年（昭和七年）五月一日、

邦人が確認されているということだが、在留届けを出していない人もかなりいたことから、昭和初期には三千人の日本人がボンベイで暮らしていた、とも言われている。今から二十年ほど前には、森田住職のところにも、戦前ボンベイで魚屋を営んでいた福岡出身の人の家族が訪ねて来て、魚河岸の、イスラム教徒の同業者の家族との再会、交流を果たしていたこともあるという。

一九三一年（昭和六年）十一月二十八日の朝、商社ニチメン（現双日）の石橋鎮雄支社長という人が、日本からやって来た、森田住職の師匠に当たる藤井日達上人（一八八五～一九八五年）を迎えに、ビクトリア駅に出かける。てつきり一等車から出てくると思っていると、藤井上人は三等車から、ほりだらけの姿で出てきた。とりあえず、今はムンバイ市内で女子高校になっているニチメンの社宅で休んでもらったが、社宅で水浴して、顔を剃ってもらったら、「輝くようなお顔」になったという。

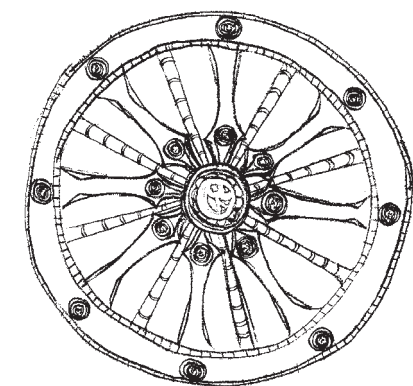
日本人は当時、ボンベイではいわゆる一等国民



庶民のタクシー・三輪車（リクシャー）

この会見で、ガンジの藤井上人に対する第一声は、「あなたがた（日本人）は経済的侵略にやってきたのか」というものだった。同席していたバジャジ氏によると、藤井上人は日本の商社からの紹介状を二通持参していた。また、アシュラム周辺には当時、日本人

の秘書として同席していた。
訪ねて、ガンジとの会見の日程が一九三三年（昭和八年）十月四日と設定される。
藤井上人とガンジの会見は、中央州（現マハラシュトラ州東部）ワルダにあるガンジのアシュラムで行われた。時間は十五分間。今、オートリクシャー（三輪タクシー）で有名なバジャジ社の、現在の当主の祖父であるラーマ・クリシュナ・バジャジ氏が、ガンジの秘書として同席していた。



チャクラ。ヒンドウ教ヴィシュヌ神の武器

がつっていると聞く。どんな人か、行って確かめて来てくれ」と言つて夫人を遣わしたのだという。

藤井上人は、ボンベイに来る前年の一九三〇年（昭和五年）にガンジが英植民地政府による塩の専売に抗議して起こした有名な「塩の行進」の話を聞いて興味を持ち、ガンジの独立闘争こそはアジア興隆のあけぼののだとして強い関心を持っていた。そして、カストルーバ夫人がボンベイで藤井上人の寺を



ムンバイ市点景 クロフォード・マーケット

ます」という意味だったという。
日本人墓地の敷地の中に寺を建ててするための当局への許可申請書の中で、藤井上人は、仏教を生み、アジア全域に恩恵をもたらしたインドが二千五百年後の現在（一九三二年）、植民地として苦悩の中にあることを悲しみ、インドを昔のような平和と繁栄の地に引き上げるため、仏教の復興が必要とし、復興の発信地として寺を建立するのだ、と訴えている。
その草庵に一九三三年（昭和八年）九月、マハトマ・ガンジの夫人であるカストルーバが訪ねて来る。これはガンジ本人が、「何でも、ボンベイに夜な夜な、太鼓を打ってはお祈りしている坊さんがいて、私に会いた

藤井上人は墓地の中に草庵を建て、「西天開教大本堂」という扁額を掲げた。「大本堂」というやや大仰な名称は、「ここから、西天（インド）に向けて仏教の教えを発信していきます」という意味だったという。

となくイギリス人たちに「帰ってもらった」という、非暴力の重要性を強調している。藤井上人は、ガンジの教えというのは、人間の持っている尊い部分を引き出すもので、あらゆる宗教の根源をガンジが教えてくれている、という風に書き残している。

この会見のことを取り上げた、一九三三年（昭和八年）か翌年の読売新聞の切り抜きには、「ガンヂーもお題目を唱えた」とある。当時、ガンジは朝の祈りで、ヒンドゥー教だけでなく各宗派の祈りを行っていたとされる。

ガンジは一九三五年（昭和十年）ごろ、「日本人に与ふる書」という文章を書いている。その中に、「私は過去多くの日本人に接してきたが、日本人の仕事に対する崇高なる責任、謙虚さ、謙譲さ、奥ゆかしさ、礼儀正しさは私にとっては非常に良い思い出である」と書いている。日本人の感性を非常に高く評価したものだ、ただ、その当時行われていた日中戦争については「日本の災いになるだろう」と言い、日本の敗戦も予言していた。

一方、ガンジが藤井上人と会見したことがボンベイの新聞に載ったため、それを読んだビルラ財閥の当主が、「あなたのためにお寺を建立しましょう」と藤井上人に申し出る。ビルラ財閥は綿花ビジネスを通じて、日本の商社と交流するうち、日本人に良い感情を持っていたとされる。同じアジア人として、日露戦争で日本がロシアを破ったことがアジア復興の糸口になる、という思いや、また、そのような日本人と文化的、宗教的に理解し合い、



ムンバイ市点景 ダウンタウンを行きかう人々と乗合バス

の商人が多数、綿の買い付けにやって来て活躍しており、それがガンジの耳にも入っていたため、会見冒頭にこのような質問が出たらしい。そのころのボンベイ駐在の日本人商社員たちは、年末になると、綿の栽培が行われている内陸部に出かけて行くのが常だった。地元のマラティ語を覚えた人たちも、数多くいたという。

冒頭のガンジの問いかけに対し、藤井上人は、「いいえ、日本の仏法で征服に来ました」と応じたので、ふっと雰囲気緩和、と言われる。

この会見の後、藤井上人は、ガンジのアシラムで暮らす人々の生活態度のすばらしさに感銘を受け、「故郷（熊本のア蘇）に帰った気がする」という印象を書き残している。ガンジについては、「二十世紀の奇跡だ」と述べ、精神力だけで、一発の弾丸も撃つこ

交流したいという気持ちもあったのだろう。

藤井上人は、インド東部ビハール州のラジギールというところに、インドの仏教復興と世界平和のため仏舍利塔を建てたりして、インド中を回ったが、主要政党のコンGRES（国民会議派）の党大会で祈念をしたこともあるという。インドの独立運動に世界の救いを見たと言ひ、その成功のために祈った、というものだと言はれる。そうした上人の行動もあつて、ビルラ財閥当主からの寄進の申し出につながったものだ、と森田住職は見ている。



ムンバイ市点景 露店に群がる市民

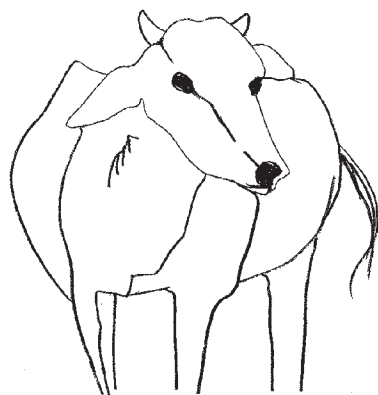
ビルラ財閥当主が、綿花ビジネスで活躍する日本人の仕事ぶりに好印象を持っていたという森田住職の推察を聞いた後、双日の西野正昭ムンバイ支店長からいただいた通読した、旧ニチメンの社史「日本綿花株式会社（一八九二年設立）五十

年史」には次のような記述がある。

「印度奥地へ出張員を駐在させたのは我が社を以て嚆矢（物事のはじまり）とし、明治四十年創始以来毎年モンスーンの終了と共に社員十数名を九月から奥地各所に派遣し…第一棉季終われば、更に第二棉季地方へ進出、かくて棉季の最も遅き南印チュチコリン地方駐在員は翌年八月頃孟買へ帰任するという有り様であつた」

ニチメンは一八九七年（明治三十年）にボンベイに出張員を置き、一九〇七年（明治四十年）には支店に昇格させる。第一次大戦後にはインド駐在の社員が八十人に達し、地元綿花業界に「確固たる勢力」を築いていた、と五十年史にはある。

日本人墓地の供養塔の墓誌に刻まれていた、働き盛りの年代で倒れた男性の中にも、綿花買い付けに奔走していた商社員がかなりいたのだろう。綿花貿易の一大拠点であつた戦前のボンベイの事情に詳しい、デリー大学のマダビ・タンピ准教授は、「当時、日本人商社員たちは、英国人も行かないような内陸の村々にまで足を延ばしては買い付けをしている、として、ボンベイの綿花業界の間では驚異の目で見られていた」と話している。



ヒンドゥー教の神に使える牛



ムンバイ市点景 チャトラパティ・シヴァジ駅に到着した列車

森田住職は、八十歳近くになった石橋上人がボンベイの日本人会の新年会に出席したとき、駐在各社の代表の人々に「今年もニチメンをよろしくお願いします」と言うのを聞いて、「愛社精神というのはすごいものだ」と苦笑したことがあるという。



森田住職は札幌出身で、一九七〇年（昭和四十五年）に、オリッサ州の州都ブバネシュワルの近くにあるダウリギリ（導利が丘）に仏舎利塔を建設する工事のためにインドに初めて来たのだという。この丘は、アシヨカ大王が、「不殺生」に改心した場所として有名で、塔を建てたのは、「平和の理念で統一を果たして欲しい」という藤井上人の願いが込められたものだった。

森田住職がボンベイに来たのは一九七六年（昭和五十一年）。その後、最も印象に残っ

森田住職は、「我々の先人は、インド内陸部の言葉も覚えて現地に入り、仕事を通して、清潔にすることとか、誠実に働くことなど、そうした日本の感性をインドの方に伝えたのです。インドは非常に宗教性、精神性のあるすばらしい国です。当時インドで活躍した商社員の方々も、経済的な利益とともに、そうしたインドのすばらしい面も合わせて日本に持ち帰って、日本文化の活性化になったのではないかと思います」と言う。

現在、インドの経済発展にともない、再び日本との関係も活発化の兆しを見せているが、その際、中国や韓国、東南アジアとは違って、インド人の日本に抱くイメージが戦前から現在まで、一貫して良好なものだったということは忘れてはならない重要な点だろう。その、まさに礎を築いた一つが、戦前、ボンベイを舞台に活躍したビジネスマンたちの活躍ぶりであったということにも思いを巡らす必要があるだろう、と痛感した。



森田住職の師匠、藤井上人をボンベイで世話した石橋鎮雄氏は、一九一九年（大正八年）にニチメンに入社。最初は中国の漢口で綿を栽培し、今のミャンマーを経てインドに来たという、綿の専門家だった。戦後は、有力政治家の河野一郎に食い込み、「夜になると新橋や柳橋でご接待した」などと話していたこともあったという。石橋さんはその後、代表取締役などを務めた後、会社を辞めて自身、仏門に入る。

ている事件は、一九九二年（平成四年）十二月に、北部ウツタルプラデシュ州のアヨドヤで起きたイスラム教礼拝所（モスク）破壊事件をきっかけにインド全土で起きた宗教暴動だという。

当時を回想して、森田住職は「ボンベイも、まさに火の海になったのです。皆、怖がって家から出られず、たとえ外に出ても軍隊と警察の車両だらけです。でも、そのころの私は毎日、太鼓をたたいて托鉢をしていましたので、いつものように外に出ました。騒動の中で私が托鉢をしても、私は以前から毎日そうしていたものですから、誰もあえて危害を加えようとする者はいませんでした」と言う。

「そうして歩いているうちに、沿道の建物の中から、ゴッド・ブレス・ユー！という大合唱が私に対して起こった。うれしかったですね。寺に帰つてくると、この周りのスラムに住んでいた人たちが一斉に拍手で迎えてくれる。こんな経験があるものですから、インドの人々には非暴力を尊ぶ精神がやはり根付いていて、民衆が良い指導者を得れば、きっと素晴らしい社会になると思うようになりました」



十六年後の二〇〇八年（平成二十年）十一月二十六日、ムンバイを再び衝撃的な事件が襲った。夜半、海からゴムボートで上陸してきたテロリストの集団が、ビクトリア駅やレ

オポルド・カフェ、タージ・マハール・ホテル、オペロイ・トライデント・ホテルなどを次々銃撃した同時テロ事件だ。百六十人以上が犠牲となり、その中には、本当に不幸なことに、日本から出張中のビジネスマンも含まれていた。

半ば私ごとになるが、ニューデリーから翌日の早朝、あわてて取材に駆けつけた私は、拠点となる宿をどこに取ろうかというとき、考えるまでもなく、ウォルリーの日本人墓地の目の前にある、フォーシーズンズ・ホテルを予約していた。二か月前、墓地の取材で立ち寄った際、日本人会の方々と、この記念誌作成に向けた最初の打ち合わせをしたのが、同ホテルの喫茶店だった。事件の間、ホテルには、我々だけでなく、CNNなど世界各国の報道陣も多く宿泊していたのだが、私にとっては、日本人墓地に吸い寄せられるように、このホテルにチェックインしたという気がしてならなかった。

取材、原稿執筆に追われる毎日の中、ある朝ホテルを抜け出して、墓地のお参りにも行った。その昔、飛行機などなかった時代、ボンベイの地で倒れた邦人はここでいったん茶毘に付され、長い船旅の末駆けつけた遺族の手で、再び日本へと運ばれて行ったのだろう。今回のテロで倒れた方の冥福を祈りながら、明治の昔から、この地で無念の最期を迎えられた方々に改めて思いを巡らせていた。

森田住職の言葉を思い出していた。「日本人の感性、インド人の宗教性、こういうもの

がこれからの世界を救って行く大切なものです。互いに自分の文化を向上し合って、自分のアイデンティティ、ルーツを確かめ合う。そしてそれを伸ばしていくことが大事で、そういう意味でも日本人が海外に出るということは、昔も今も、非常に尊いことなのだと思います。ですから、ムンバイの日本人墓地をお参りすることとは、日本の経済の基礎を作られ、日本の心で海外の文化に接して学んで日本に持ち帰り、我々のために苦勞して働いてくださった方々を顕彰することなのです」。

「今、縁あってインドに暮らし、仕事する者として、先人たちに恥ずかしい気構えで日々を過ごしているのかどうか。日本人墓地のことを初めて知り、訪ねたことで、そうしたことを自問する機会を与えていただいたことを、今は深く感謝している。今後、一人でも多くの人がムンバイの日本人墓地に立ち寄り、手を合わせる機会を持っていただけよう願って、拙文の結びとさせていただく。」